

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Noun-modifying System of Verbs (continued) : Location Modifiers and Condition Modifiers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, TAKAHASI, Tarô メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001734

動詞の連体修飾法 (2)

—場所的な結びつきと状态的な結びつき—

高橋太郎

1 前回の報告¹⁾と今回の報告との関係

前回は、動詞の連体修飾法について、その全分野をスケッチした。最初にそのワク組みだけをここにもう一度かかげることにするが、その前に、今回用語を改めるので、その修正点を示しておく。

(前回)	(今回)
規定	→ 結びつき
結びつきの形態	→ 組み合わせ (の形態)
修飾語	→ カザリ
被修飾語	→ カザラレ

修飾関係の、文法的形式の側面を「組み合わせ」、文法的意味の側面を「結びつき」と呼ぶ。たとえば、「私の住んでいる世界」は、「名詞を主語とし動詞を述語とするカザリで名詞をかざる組み合わせ」であり、「その場所で行なわれる動作でかざる結びつき」である。

この基本的な用語の訂正によって、前回にのべた連体修飾法のカテゴリーの名も一部訂正する。前回、連体修飾法を次の5種類に分類した。なお、()内は前回の用語である。

- A 叙述関係の結びつき (叙述規定)
- B 具体化の結びつき (具体規定)
 - 例1 人が皆なザンギリで無腰で歩いてゐるさま (時47)
- C 内容づけの結びつき (内容規定)
 - 例2 その息子が突然帰って来た夢 (時248)
- D 条件づけの結びつき (条件規定)
 - 例3 伝馬町に泊った翌日 (桜214)

40 動詞の連体修飾法 (2)

E 連体修飾からの逸脱 (形式規定)

例4 いくら心配して見たところで、二人は何うすることも出来なかった。(時299)
そして、Aについては、次のようなものを示した。

主体

例5 それを聞いた奥方 (時63)

対象

例6 人々のつかふ扇子 (桜51)

相手

例7 良太の世話になった勤王家 (時8)

手段

例8 牛肉を包んだ新聞紙 (千113)

場所

例9 勝子のすむ家 (桜200)

時間

例10 教授達の家庭へ一同招待された夜 (桜18)

前回は、主として、抽象的な結びつきであるB～Eについてのべ、Aについては、具体的な結びつきが抽象的なものへ移行する過程の問題にかかるとのだけを取りあげた。今回は、Aについての問題を扱うことにする。

資料は、前回の4書に2書を加える。本稿の引用例は、出典を頭漢字で示し、ページを数字で示す。

田山花袋「時は過ぎ行く」岩波文庫

島崎藤村「桜の実の熟する時」岩波文庫

島崎藤村「千曲川のスケッチ」岩波文庫

二葉亭四迷「其面影」岩波二葉亭全集

宮本百合子「道標」岩波文庫

野上弥生子「真知子(前編)」岩波文庫

Aの内部を小分けする場合に、どの種類にいてよいかわかりにくいものがある。たとえば、次のようなものは、カザラレがカザリの主体であるのか対象であるのか、今のところはっきりしない。

例11 小屋に近く繫いである舟 (桜72)

例12 其処へ寝かしてある生児 (時183)

例13 大して気に入らない着物 (真41)

例14 気になっていた退学のこと (真35)

また、たとえば次のようなものは、カザラレがカザリの場所のようでもあり、主体のようでもある。

例15 淋しい疎林のある雪道 (道186)

例16 畳を敷いた四畳半 (真48)

例17 蒔絵のある硯箱 (桜133)

こうした、いくつかの種類の、カテゴリー分けに問題のあるもののうち、今回は、場所か主体か？に関係のあるものを取りあげる。

2 問 題

次にあげるような組み合わせでは、いずれも、カザリが、カザラレの表わすものの中または表面に存在する動作（動詞で表わされるようなことがらを「動作」としておく。）を表わしている。その意味で、カザラレは、カザリとの関係で場所的である。

例18 曲芸をやる劇場 (道180)

例15 淋しい疎林のある雪道 (道186)

例19 石に苔のついたその小道 (道129)

例16 畳を敷いた四畳半 (真48)

例20 住む人の変わった以前の田辺の家 (桜113)

例17 蒔絵のある硯箱 (桜133)

しかし、そうかといって、これらを全部、「その場所で行なわれる動作でかざる結びつき」といってしまうにはしのびないものがある。なるほど例18は「場所名詞を、その場所で行なわれる動作でくわしくしている」といえるだろう。しかし、例17になれば、「モノ名詞を、その状態でくわしくしている」といったほうがよさそうな気がする。そして、この両例にはさまれた四つの例は、その両方の性質をかねそなえており、いわば中間に位するようである。

——例18と例17の結びつきが違うなら違う根拠を見つけたい。そして、はさまれた諸例が分けられるものならスパッと分けたい。分けられないとしても、体系の中にきちんと位置づけたい。——というのが、本稿のねらいである。

今あげた諸例はすべて前回にのべたカテゴリーAに属しており、カザラレの示すモノゴトは、カザリの示す動作の成立に関係している。たとえば「曲芸をやる」のは「劇場」においてであって、これは「私が馬にのった話」(C)などとは異なった結びつきである。

42 動詞の連体修飾法 (2)

Aに属するものは、次のようにカザラレの文法的な形²⁾をかえてカザリの中に入れることができる。(この場合、カザリの方の各単語の形態が変わることもある。)このようにして、カザラレをカザリの方に入れこんだ場合、もし形のかえ方(助詞のとり方)がかわれば、そのことがカザリとカザラレの結びつき方と何らかの關係を持っていると考えられる。

18' 劇場は曲芸をやる

19' その小道は石に苔がついている

しかし、おきかえ法にたよると、全部「は」をつける形が通り、そのほかに例18は「で」、例15・16・17は「に」、例19・20は「の」をつける形でも通るので、どちらがきめ手になるのかわからない。(この場合「は」が係助詞的でなく、総主格を表わす格助詞的になるので、「に」や「で」と対等にはりあう。)

その上、おきかえることは、組み合わせを変えることになるので、特徴発見の手がかりにこそなれ、連体修飾そのものの法則とは直接に結びつかない。

そこで、カザラレの性格、カザリの性格、カザリとカザラレの關係を直接みる方法で、この問題ととりくもうとするのが、この稿である。

なお、次のような組み合わせは、今回の考察の範囲に含まない。

例21 あたかも植民地の村落のやうに三棟並んだ亜米利加人の教授の住宅 (桜124)

例22 自分の想像する世界 (桜182)

これらは、いずれも、カザラレが場所を表わす名詞、あるいはそれに近い名詞でできている。しかし、例21は、カザラレがカザリの表わす動作の主体を表わし、例22は、カザラレがカザリの表わす動作の対象を表わしている。そして、2例とも、カザリが、カザラレの表わすものの表面や中で行なわれる動作を表わしていない。

つまり、ここで「場所」かいなかを問題にするのは、カザリの表わすことごととカザラレの表わすものごとの關係についてであって、カザラレそのものについてではないのである。

3 結びつきに接近するための観点

結びつきを明らかにするためには、カザリとカザラレの組み合わせの形態の裏付けがなくてはならない。そのためには、①カザラレの性格と、②カザリの性格が検討されなければならない。

カザラレの性格 カザラレ名詞の語イ的意味の性格が場所性であるかモノ性で

あるかということが、結びつきのありかたにひびいているようである。

- 例23 牧場のあるところ (千12)
 例24 小さな池のある庭 (時273)
 例25 窓のある小部屋 (桜171)
 例26 縦にケイのある実用的な便箋 (道107)
 例27 角のある片仮名 (道156)
 例28 引出しのある机 (資料外)
 例29 目玉が三つあるもののなあとに (考え物)

上の例では、大体、上にあるものはカザラレ名詞の場所性が強く、下にあるものはモノ性が強い。そして「ところ」と「もの」は、それぞれの極となる抽象名詞である。(なお、この両者は類概念を表わす抽象名詞であって、例23・29は、ともに具体化の結びつきへの移行過程にあるが³⁾、当面の問題の側面に関しては、それとは独立に扱える。)

また、これらの諸例の結びつきも、やはり上の方が場所的であり、下の方が状態^{めし}の主的であるようなので、ここに組み合わせと結びつきの相関が見られそうである。

例24のカザラレは「ところ」といいかえられるが「もの」といいかえられない。例28はその逆である。そして、例25は、その両方にいいかえることができる。このことは、各結びつきの特徴を知る上での手がかりになるのではないか。

また、例26~29のカザラレを「ところ」にすると結びつきが変化する。つまり、「ケイのあるところ」「引出しのあるところ」というのは、便箋全体、机全体でなく、ちょうどそれぞれのある部分的箇所を示すことになる。ここに場所的な結びつきと状態^{めし}の主的な結びつきの違いのきめてがあるかに見える。

ところが、「池のあるところ」といった場合にもこれと同じことがいえる。つまり、その「ところ」は庭全体の場合と、まさに池のある箇所の場合とがある。「議事堂のあるところ」というのは、東京や千代田区をさす場合と議事堂の敷地をさす場合がある。これが文脈における指し方の違いなのか、結びつきの違いなのかということとはすぐには断じがたい。場所の結びつきが箇所の結びつきだなどというのは早計である。

しかしともかく、カザラレがトコロへ抽象される語かモノへ抽象される語かということとは、一つの有力な手がかりであろう。

カザリの性格(1) 今問題にしている組み合わせの多くは、カザリが動詞と名詞からできている。その名詞の、カザラレ名詞との関係が、結びつきのありかたに

44 動詞の連体修飾法 (2)

ひびいているようである。

- 例30 盆おどりのある小路 (資料外)
例31 長火鉢のある茶の間 (時123)
例32 井戸などのある細い通り (時133)
例33 歩道と車道のある道路 (資料外)
例34 すこし勾配のある道 (干33)
例35 不揃いなところに趣のある淋しい通り (道26)
例36 特徴のある道 (資料外)

「盆おどり」は「小路」という存在物の外にあるものごと、「長火鉢」は「茶の間」におかれたもの、「井戸」は「通り」にくっついたもの、「歩道と車道」は「道路」の構成物、「勾配」や「趣」は「道」「通り」の持つ性質であり、「特徴」は、そういう性質を類概念に抽象したものである。つまり、この語例の上のほうは、カザリの中の名詞がカザラレの表わすものの実体の外にあるものごとを表わし、下のほうは、実体の内部に存在するものごとを表わす。

そして、そのことのために、上のほうでは、カザラレがカザリの表わすことからの起こる場所を表わす結びつきとなり、下のほうでは、カザラレが、カザリの表わすことからの状態の主を表わす結びつきとなるという傾向が生じるのではなからうか。

今、動詞が「ある」の場合についてのべたが、動詞を一定にしなくても、その傾向が出るようである。

- 例37 伸子の立っている庭 (道205)
例38 粉雪の降るモスクワの街 (道45)
例39 電車の通っていない商店街 (道15)
例40 住む人の変わった以前の田辺の家 (桜113)
例41 陸稲の熟した畠 (時283)
例42 杉森の繁った社 (時246)
例43 扉のしまった教室 (桜51)
例44 石に苔のついたその小道 (道129)
例45 大理石が踏み減らされたその階段 (道49)

上の例のうち、例37～39はカザリの中の名詞がカザラレ名詞の表わすものの外にあるものを表わし、例43～45は、カザリの中の名詞がカザラレ名詞の表わすものの部分であるものを表わし、例40～42は、その中間的な性格を持っている。

そして、そのカザリ名詞のカザラレ名詞に対する関係の性格が、「ある」の場合についてのべたのと同じように、結びつきのあり方にひびいているようである。

以上、例30～45についてのべた、カザリの中の名詞の性格は、カザラレに対する関係において成立する性格であるが、例34～36のカザリの中の名詞は、いずれもある種の特性を表わす抽象名詞であり、この種の名詞については、語イ的意味の性格もかなりきくもののように思われる。

また例37のように固有名詞は、逆にカザラレの表わすものの外にあるものとなる傾向があるのではないか。

カザリの性格(2) カザリの中の動詞の性格も結びつきのありかたにひびくようである。

- 例46 食堂から寄宿舍の方へ通ふ道 (桜116)
 例47 かじかを追ひ廻した細い谷川 (桜102)
 例48 歴代の殿様の住んでゐた田舎のお城 (時18)
 例49 遺骸の寝かせてある隣の間 (時259)
 例50 三脚しか椅子の置いてない部屋 (桜81)
 例51 硝子戸のはまった雑誌社 (桜119)
 例52 車よせのついた表玄関 (道26)

「通う」「追ひ廻す」などは空間的な移動を表わす動詞であって、カザリにこういう動詞がくると、場所的な結びつきになりやすいようである。例53などは、そのため、人をあらわす名詞で作られたカザラレが組み合わせの中で、場所としての家を表わすべく強いられている。

- 例53 ポリニャーク夫婦の感じは仲子が語学の稽古に通ってゐるマリア・グレゴリーエヴナの生活雰囲気とまるでちがってゐた。(道157)

「つく」「はまる」などは、同じカザリの中の名詞の表わすものをカザラレの表わすものにくっつけて、その部分または所属物にする動作を表わしている。こういう動詞がくると、状態的な結びつきになるようである。例51・52の「雑誌社」や「表玄関」などは建物を表わすが、建物は場所的側面とモノ的側面を持っており、こういう組み合わせの中ではモノ的側面が浮かびあがってくる。

なお、例54では例52と異なって「玄関」が場所として働いている。

- 例54 もう一度捨捨は小父さんの家の玄関に、よく取次に出ては御辞儀をして奥の方へ客の名前を通したりその人の下駄を直したりした玄関に、片隅に本箱を並べて置いてそこを自分の小さな天地とした玄関に、^{しよんぼり}悄然と帰って来た自分を見つけた。(桜210)

例49～50は、例46～48と例51～52の間にあるものようである。

このように、カザリの中の動詞の語イ的意味がくっつけ的であるかどうかとい

うことが、状態的な結びつきであるかどうかにはびいていると考えられる。

カザリの中の動詞の語イの意味が意志的か無意志的かということも、結びつきにひびくようである。

例55 良太のいる家 (時59)

例56 長火鉢のある茶の間 (時123)

「いる」も「ある」も存在動詞である。しかし「いる」は意志的であり、「ある」は無意志的である。このことから、「長火鉢のある」が相対的に固定性をおび、「良太のいる」が相対的に運動性をおびる。そして、例55が場所的な結びつき、例56が状態的な結びつきに傾く。

カザリの中の動詞が動作を表わしているか状態を表わしているかということも、結びつきにひびくようにみえる。

例57 岡見のやうな人の生れた家 (桜195)

例58 結婚した裏の家 (時271)

例59 きょう額をかけるへや (資料外)

例60 青い瓢箪の生り下った隠者の住居のやうな門 (桜214)

例61 気の晴れ晴れする室 (道190)

例62 腰かけても坐っても飲食することの出来る気楽な部屋 (桜166)

例63 町人でも実力さへあれば、何んなにでも立身出世が出来る世の中 (時26)

このことは、今までのべたことほどはっきりしないが、例57～59はなんとなく場所的な結びつきのにおいがこく、例60～63は、どことなく状態の結びつきの意味がある。

動詞のほうをみると前3例は特定時の動作を表わし、後4例は時を限定しない状態を表わしている。今のところ、この違いが、動詞の語イの意味の性格と文法的性格(テンス・アスペクト)とのどういうからみあいによって生じたものか、よくわからない。

カザリの性格(3) 今までカザリの中の名詞と動詞を別々に取りあげてきた。これらは、どちらも、結びつきのありかたにひびく要素としての意味を持っているが、組み合わせの構造としては、それぞれが別々に働いているのではない。

例64 風の吹き荒ぶ林 (時12)

例64では、「風の」と「吹き荒ぶ」がめいめいに「林」を修飾しているのでなく、「風の吹き荒ぶ」が全体として「林」を修飾しているのである。そういう意味で、名詞と動詞のいっしょになったものとしてのカザリの性格について考える必要がある。カザリの中の名詞の、カザラレ名詞に対する性格にしても、動詞の

参加においてはじめていえることである。たとえば、例45では「大理石」は「階段」の部分であるが、例45'では、部分でない。

例45' 大理石が運びあげられたその階段 (資料外)

カザリの中の動詞の性格も、カザリの中の名詞の参加においてきまり、従ってカザリ全体としての性格が変わることがある。

例65 朝霧の籠った谿谷 (千56)

例66 赤児と共に籠って居た部屋 (桜163)

上の2例は、カザリの中の動詞がともに「籠る」であるが、カザリの中の名詞の性格によって、例65では「籠る」が無意志的な意味を実現し、例66では意志的な意味を実現している。そのことによって、例65ではカザリが状態を表わし、例66では動作を表わしている。その結果、例65は状態的な結びつきに傾き、例66は、場所的な結びつきに傾く。

次のような組み合わせでも、カザリの名詞と動詞がいっしょになって、カザラレの表わすものの構成の状態を表わしている。

例67 こまかく粒のそろった字面 (道203)

例68 熱心と不安のまじりあった表情 (道128)

このように、名詞と動詞のいっしょになった形でカザリ全体として、部分性・状態性・運動性・移動性などの性格をもつのである。

以上は、名詞と動詞の組み合わさったカザリについてのべたが、名詞のないカザリもある。

例69 元来た道 (桜74)

例70 帰るみち (道180)

例71 隣の間は、坐るところもない (時259)

こうした組み合わせでは、名詞なしでカザリが構成されているのであるから、カザリの中の動詞と、全体としてのカザリとが一致するわけである。なお今回とりあげている問題の範囲には、このような形の組み合わせは少ない。

結びつきの性格 結びつきの性格は、カザリとカザラレの関係において成立するものであって、これをバラバラにしては存在しない。その意味で、今までのべてきたカザラレの性格やカザリの性格は、結びつきの性格そのものではない。しかし、それらは、結びつきの性格に影響を与える重要な要素である。そういう要素をきちんととらえたいので、始めて結びつきの性格をあきらかにすることができる。そういう観点から対象に接近した。

4 場所的な結びつき

空間的な結びつき 場所的な結びつきとは、カザリが、カザラレの表わすものを場所とすることがらを表わす結びつきである。こういう見方をした場合に、例24はそれに当たるようであるし、例28はそうでないようであるということは、すでにのべたが、その時は、それはカザラレの語イ的意味の性格によるだろうと考えた。

- { 例24 小さな池のある庭 (時273)
- { 例28 引出しのある机 (資料外)

しかし、次の2対をそれぞれくらべると、カザリを組み合わせから切り離れた、カザラレの語イ的性格だけではかたづけられなくなる。

- { 例56 長火鉢のある茶の間 (時123)
- { 例25 窓のある小部屋 (桜171)
- { 例72 三味線の糸を入れた箱 (時188)
- { 例17 蒔絵のある硯箱 (桜133)

どちらの対も上の方が場所的であり、下の方が状態的であるようであるが、その違いは組み合わせの中でしか説明がつかないようである。そこでこれらの諸例の組み合わせをながめると、例24・56・72には共通した結びつきの性格を見出すことができる。

この組み合わせにおいて、カザラレである「庭」「茶の間」「箱」は、いずれも、表面または内部に何かをおく空間(予定空間)をもったものを表わし、そして、カザリがその空間に存在することがらを表わしている。

それに対して、例25・17は、カザリが、その空間でない所に存在することがらを表わしているし、例28はカザラレの表わすものに、そういう空間が予定されていない。この三者に共通するのは、カザリがカザラレの表わすものの実体において存在することがらを表わしていることである。

上のようなことから、ここに二種類の結びつきを見出すことができる。カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間において存在・運動することがらを表わす結びつきを「空間的な結びつき」と呼び、カザリが、カザラレの表わすものの実体において存在・運動することがらを表わす結びつきを「状態的結びつき」と呼ぼう。

空間的な結びつきと状態的な結びつきとは明らかにことなる種類の結びつきで

あるが、その中間に位する結びつきもある。

- 例73 畳を敷いた四畳半 (真48)
 例74 テーブルかけをかけたテーブル (道5)
 例75 草の生えた道 (資料外)
 例32 井戸のある細い通り (時133)
 例76 雪のつもった道 (道145)
 例77 花屑の散らかった土間 (真43)
 例78 熱気のコもったへや (資料外)

例73~78は、いずれもカザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間に存在することがらを表わしている点で空間的な結びつきの側面をもっているが、しかしそれによってカザラレのもつ空間性がおかされていない。いわば空間作りの作業に参加するような形で、実体において存在するという側面をもっている。こうしたものは、空間的な結びつきと状態的な結びつきの中間にあるものであって、これを「空間づくりの結びつき」と呼ぼう。

空間的な結びつきは、さらに動作=空間的な結びつきと存在=空間的な結びつきに分けられる。前者は例79~81のように、カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間で行なわれる動作を表わし、後者は例82~88のように、その空間に存在することがらを表わす。

- 例79 昔自分が育てられた町 (桜112)
 例80 浅見先生が牧師として働いて居る会堂 (桜14)
 例81 リンゴ、タバコを売ってある屋台店 (道58)
 例82 楔を積み上げた庭の内 (千162)
 例83 遺骸を寝かせてある隣の間 (時259)
 例84 水のたまったくぼみ (道51)
 例85 死骸をのせた車 (時56)
 例86 伸子たちののっている櫓 (道15)
 例87 どっさり物をのせた大盆 (道51)
 例88 水を入れた手桶 (桜61)

動作=空間的な結びつきの場合は、カザラレがふつつ場所名詞(空間と位置をもった名詞)であるが、存在=空間的な結びつきの場合は、カザラレが場所名詞である場合と、入れ物・乗り物名詞(位置をもたない)である場合とがある。

カザラレが場所名詞であって、カザリの動詞が、ものをおいたりくっつけたりするような他動詞である場合、その動詞の実現する文法的意味の性格によって、動作=空間的な結びつきになったり、存在=空間的ないし状態的な結びつきになっ

たりする。たとえば例82の組み合わせが、もし「私が積み上げた」という動作的な意味ならば、動作=空間的な結びつきであり、「現在積み上げられている」という状態的な意味ならば存在=空間的な結びつきである。また、たとえば例89が、もし「かつて私がアスファルトを敷いた（しかし今は舗装がとれているかもしれない）」という意味ならば、この組み合わせは、状態的な結びつきではなくて、動作=空間的な結びつきである。

例89 アスファルトを敷いた道路 (資料外)

しかし、こういう(例82・89のような)場合、カザラリの中に主語がなければ、動作=空間的な結びつきになることはまれである。

ここで、空間的な結びつきを実現するカザラリ名詞についてのべる。

動作=空間的な結びつきを実現する組み合わせでは、カザラリが場所名詞である。ここに場所名詞というのは、予定空間と位置をもつものを表わす名詞で「町・国・道」のような土地の或る区画、「空・山・谷」のような自然のものから「家・学校・室・玄関・階段」のような建物などを含む。また、これに準ずるものとして「階級・階層・世界・世の中」のような社会的な空間と位置をもつもの、「戦争・事業・会・市」のように一定の状況的位置をもつものなどがある。また、場所の抽象概念を表わすものとしては「ところ・場所・位置・場・立場・環境」などがある。

例90 平和に暮らしてゐる社会 (真201)

例91 子供の時分から聞き慣れた可懐しい言葉の話される世界 (桜102)

例92 山瀬が出席しなければならぬ会議 (真94)

例93 達磨を売る市 (千176)

例94 陣羽織にだんぶくる、火縄筒を持って調練しつつ出かけていった維新の戦争
(時248)

例95 それが唯一の哲学である彼女の環境 (真177)

例96 女の学問をする場所 (桜178)

例97 舞台を斜に見なければならぬ位置 (真134)

存在=空間的な結びつきを実現する組み合わせでは、カザラリは入れ物・乗り物名詞になることが多く、また場所名詞になることもある。入れ物・乗り物名詞というのは予定空間は持つが位置を持たない名詞である。これには「鉢・箱・タバコ入れ・盆・茶わん」などの入れもの、「車・櫓」などの乗り物、「机・台・七輪」のようなものをおく台がある。そのほか「かべ・ぼうしかけ」のようにものをかけるところや「帳面・便箋」のようにものを書く紙などがこれに準じる。

例98 小父さんが釣に来てよく腰をかける石 (桜73)

例99 昼間書いて置いて貰った帳面 (時88)

カザラレが場所名詞や入れ物名詞であっても、カザリがその実体に存在することがらを表わす場合は状態的な結びつきになる。場所的名詞よりも、入れ物名詞のほうが実体的側面が強い。さきに「3 結びつきに接近するための観点」でカザラレ名詞の語イの意味の性格についてのべたことは、このことと関係が深い。

空間的な結びつきのカザリの性格については「5 状態的な結びつき」のところでのべる。

箇所的な結びつき 空間的な結びつきの場合、カザラレは予定空間をもつものを表わすが、その空間が極度に小さくなったり、ゼロになったりすることがある。

例100 旗の立っている地点で折り返す (資料外)

例101 二つの円の接する点 (資料外)

例102 中線の底辺と交わる所 (資料外)

上のような組み合わせは、あとにのべる「位置的な結びつき」を実現する組み合わせと似ているが、後者においてはカザリの示す動作がカザラレの表わす位置を含むところの、より広い空間で行なわれるのに対し、前者においては、カザラレの表わすところそのものにおいて行なわれる。この意味で、例100～102は空間的な結びつきに属する。

上の3例のうち例100は、存在=空間的な結びつきであり、101～102は動作=空間的な結びつきである。

この結びつきを一つのカテゴリーとしてとり立てるほどのこともないと思うが、カザラレがカザリの表わすことがらのある、まさにその箇所を示している点に着目して、「箇所的な結びつき」と呼んでおこう。

さきに例23～29で、「ケイのあるところ」「引出しのあるところ」のようにかえてできた組み合わせも箇所的な結びつきといえよう。つぎの3例も同じである。

例103 あの広小路で馬車の停ったところにあった並木 (桜112)

例104 中央の大テーブルの多計代がいつも坐る場所の下に (道132)

例105 ……の物語のある部分 (道38)

箇所的な結びつきを実現する組み合わせでは、カザラレは、場所を示す抽象名詞である

位置的な結びつき 次のような組み合わせでは、カザラレは、位置を表わす名詞であり、カザリは、そのカザラレの表わす位置を起点、終点、通過点、接点、

交点とする運動を表わしている。この結びつきを「位置的な結びつき」と呼ぼう。

- 例106 一時間前通げ込んだ部屋 (真211)
 例107 女中に案内された茶の間 (桜195)
 例108 松並木が行く先にあった。(桜202)
 例109 君が来て呉れた高輪の家 (桜172)
 例110 モスクヴへ入る一つの門 (道25)
 例111 客の出入する格子を開けて (桜30)

この組み合わせのカザラレになる名詞は、位置さえあれば空間は要求されない。「門」「格子」「先」などは、点でさえあれば、面であったり線であったりする必要はないのである。この点は空間的な結びつきと異なっており、その故に、場所性名詞を次のように3種類に分ける根拠が生じる。

- 空間と位置をもつ名詞……場所名詞
- 空間をもち、位置をもたない名詞……「入れ物・乗り物名詞」など
- 位置をもち、空間をもたない名詞……「門・終点・通過点・地点」など

この組み合わせのカザリの方には、移動動作を表わす動詞が使われる。「行く」「来る」「通う」「通る」「出る」「はいる」「集まる」などの動詞が多い。

この組み合わせでは移動動詞が使われるが、仮定の移動によって位置や距離を表わすこともある。

- 例112 海岸から四百マイルも與にはいった土地 (真108)
 例113 門から少し行った垣の傍 (時245)
 例114 鉄道の踏切を越えた石垣の下 (干18)
 例115 横丁を左へ曲った狭い戸口が、伸子たちのあるホテル・パッサージだった。
 (道48)
 例116 竹藪の尽きたところ (桜20)
 例117 風呂場の戸をあけた処にある三畳ばかりの一間 (時24)

このような、仮定的な移動動作を示す場合には、カザリに主語がないのがふうである。

位置的な結びつきが実現される場合には、カザラレ名詞の位置性が要求され、人名名詞も家になることは、すでに例53でのべた。

例118は「集める」という語を使っているが移動性でなく、存在性である。存在性であるとするればカザラレの要求空間のことがらかどうかが問題になるが、そうでないので、状態的な結びつきである。同様に「はいる」なども移動動作を表

わしたり、存在状態を表わしたりする。

例118 雅致のある色彩を集めた書棚 (桜180)

空間=位置的な結びつき カザラレが通過位置を表わす場合、その位置が一点でなく、一定の空間をしめている時には、空間的な結びつきをかねることになる。

例46 食堂から寄宿舎の方へ通ふ道 (桜116)

例119 彼が好きで歩いて行く道 (桜111)

例120 事務室の方へのぼってゆく階段 (道196)

例121 私達の歩いて行く河岸 (千72)

例122 伸子たちが歩いて行く歩道 (道152)

例123 通ひ慣れた市街の中でも (桜111)

これらの組み合わせでは、カザラレが「道」またはそれに類するものになることが多く、カザリは「通る」「行く」「来る」などが多い。「歩く」「走る」などの語は「歩いて行く」「走ってくる」などの形になってここに仲間入りする。

このような、空間的な結びつきと位置的な結びつきをかねたものを、「空間=位置的な結びつき」と呼ぼう。

以上にのべたように、場所的な結びつきとして、基本的に空間的な結びつきと位置的な結びつきがあり、そのあわさったものとして、空間=位置的な結びつきがあるわけである。

5 状態的な結びつき

状態的な結びつきとは、カザリが、カザラレの表わすものの実体において存在・運動することがらを表わす結びつきである。

この組み合わせのカザラレには、たいがいの名詞がなることができる。なりにくいのは、次のような名詞である。

(i) 空間・位置だけを表わして実体を表わさない、場所的な抽象名詞……

「ところ・場所・位置・点・地点」など。状態的な事実を表わそうとしても、カザラレにこれらの語を使ってしまうと、場所的な結びつきの側面が出てきてしまう。このことは、例23～29のところでものべた。

(ii) その他実体性のうすい抽象的な名詞一般……これは、次の二つの理由による。

- ① 状態的な結びつきを実現する組み合わせでは、カザレが実体を表わさなければならない。
- ② 名詞が抽象化すればするほど、ものごとのとらえ方がはっきりしてきて、そういう名詞がカザレになった場合、カザリの受け方、つまり結びつきのありかたに対する要求力が強くなる⁴⁾。

なお、予定空間と実体とをあわせもつ場所名詞や入れ物・乗り物名詞などは、その空間と実体のウェイトのあり方で、状態的な結びつきを要求する度合が異なる。これらのことは、すでに、「4 場所的な結びつき」の「空間的な結びつき」の項でのべたので、ここではくりかえさない。

状態的な結びつきには、存在=状態的な結びつきと、状況=状態的な結びつきとがある。前者は、カザリが、カザレの表わすものの実体において存在するものごとを表わす結びつきであり、後者は、カザリが、カザレの表わすものの実体の部分または周辺にあるものの状態や動きを表わす結びつきである。

- 例17 蒔絵のある硯箱 (桜133)
- 例28 引出しのある机 (資料外)
- 例124 そばかすのある、小さい富美子 (真18)
- 例125 鞆^{なづたん}風^そに反りのある矛形^{はこ}飾り (道110)
- 例126 奥ゆきのある張出し窓 (道17)
- 例127 温みのある表情 (桜199)
- 例128 ツンとしたところのある匂ひ (道124)
- 例129 光沢のある紙 (桜76)
- 例130 慎しみのある沈黙 (真69)
- 例131 特色のある隆い鼻 (桜204)
- 例132 大きな輪かざりの見える門 (桜211)
- 例133 ショウ・ウインドウが一面に白く凍ってゐて花の色も見えない花屋の店
(道15)
- 例134 亢奮ののこっている信子 (道141)
- 例135 金釦のついた新調の制服 (桜152)
- 例136 バタをつけたパン (道11)
- 例137 矛形飾りのついたクレムリンの城壁 (道110)
- 例138 仕切りのついた箱棚 (道196)
- 例139 瀟洒な模様をついた芝居茶屋の団扇 (桜24)
- 例140 学士の肩書の附く貴方 (真53)
- 例141 更紗の布のはられた肱かけ椅子 (道190)

- 例142 金網を張った明り窓 (桜43)
- 例143 自分の姓が貼られてある仕切り (道196)
- 例144 「いせざきや」と仮名で書いた白い看板 (桜129)
- 例145 正面にアーチの形を描いた白壁 (桜180)
- 例146 靴をはいた足 (道14)
- 例147 皮手袋をはめた手 (道116)
- 例148 宝石のはまった指先 (真80)
- 例149 荷物をかけた彼の肩 (桜222)
- 例150 カラーをはだけたワイシャツ (道99)
- 例151 箸をさした山盛飯 (時259)
- 例152 針をさしたつくろひもの (道129)
- 例153 薄明りのさす座席 (道37)
- 例154 夏の日の射した障子 (桜67)
- 例155 神経的な嫌悪を浮かべた顔 (真132)
- 例156 唐草模様のうちき出た壁紙 (道131)
- 例157 十字架の飾られた尖った屋根 (桜14)
- 例158 古い苔の生えた墓石 (桜168)
- 例159 口髭の生えた男 (時298)
- 例160 綺麗に爪みがきの出来た指 (真80)
- 例161 綺麗に剃刀のあたった頬 (真114)
- 例162 綿の厚く入った黄縞のねんねこ (時14)
- 例163 青い斑の入った羽 (桜102)
- 例164 世帯やつれのひそんだ中年の主婦の眼つき (道35)
- 例165 ほこりのたまったふだん着 (真67)
- 例166 十字架を高く置いた屋根 (桜183)
- 例167 環境というものに重きを置いた文学史 (桜145)
- 例168 雪のつもった大きい樹 (道195)
- 例169 白いものの混った髭 (道151)
- 例170 フランドル派や南欧のものをさへ交へた豊富な蒐集 (真62)
- 例171 口重さと沈着の一緒になった米子 (真48)
- 例172 革表紙の手擦れた聖書 (桜15)
- 例173 捲毛の渦まく頭 (道192)
- 例174 胴のふくらんだ黄土色の太い二本の柱 (道196)
- 例175 腰の曲った青木の親戚のお婆さん (桜173)
- 例176 さきのプツンときれたGペン (道130)
- 例177 鼻のさきが一寸上向きになっている容貌 (道83)

- 例178 その煙で目を細めた顔 (道95)
 例179 丸っこい鼻のさきを一層光らした顔 (道190)
 例180 いつも眠さうな目をしたその円い顔 (真107)
 例181 化粧をおとした顔 (道201)
 例182 ボタンの一つとれたジャケット (道76)
 例183 柳の葉の落ちた並木 (桜113)
 例184 宝石の光る指 (真141)
 例185 血の流されている首の座 (道112)
 例186 きつい脂のういた美味さうなボルシチ (道31)
 例187 襦に刺繡のある日本服 (道83)
 例188 襟に狼の毛のついた外套 (道102)
 例189 爪に染料のあとの附いた手 (真208)
 例190 小さい眼に力の入った表情 (道29)
 例191 ふくらみのへった雪 (道209)
 例192 少し色のさめた水色のスウェーター (道54)
 例193 いくらか古びの目立つ海老茶色の外套 (道194)
 例194 立場のきまってるない伸子 (道86)
 例195 意味のはっきりしない不愉快事 (道169)

以上たくさん例をあげてきたが、このうち、例171までが存在=状態の結びつきを実現している組み合わせであり、例172からが状況=状態的な結びつきである。

存在=状態の結びつきのカザリには、次のようなものがある。

- (i) 「ある・残る・見える」のような、存在を表わす動詞、または存在の側面が強く出た動詞が使われているもの。
 (ii) 「つく・つける・はる・書く」のような、くつつくことを表わす動詞を使って、何かがかくつついて存在することを表わすもの。
 (iii) 「はく・はめる・はまる・かける・あたる・さす・うかべる・うかぶ・いれる・はいる・かざる・つもる・たまる・おく」のような、ふれた状態で存在することを表わす動詞を使って、何かか、そこに存在することを表わすもの。
 (iv) 「はえる・できる・生じる・現われる」のような、出現を表わす動詞を使って、何かかそこに現われて存在していることを表わすもの。
 (v) 「交える・まじる・案配する」のような、配合を表わす動詞を使って、構成部分の存在することを表わすもの。

なお、(i)の「見える」は例132~133のような使われ方の場合であって、例196・197のような使われ方の場合は、知覚の側面が打ち出されており、この組み合わせは、運動・空間的な結びつきとなる。

例196 障子の嵌硝子を通して隅田川に見える二階座敷 (桜94)

例197 富士山に見える団地 (広告)

状況=状態の結びつきのカザリには、次のようなものがある。

- (i) 部分のことをのべたもの (例172~180)
- (ii) くっつきもののことをのべたもの (例181~184)
- (iii) 発生物のことをのべたもの (例185~186)
- (iv) 部分に生じたものごとをのべたもの (例187~190)
- (v) 側面もしくは抽象的な所有物についてのべたもの (例191~195)

以上、カザラレが予定空間をもたないものを表わす場合について、例をあげてのべたが、予定空間を持つ場所名詞や入れ物名詞などの場合には、カザリの示すことがらが予定空間に存在しないという条件がつくので、かなり制限される。これを、今、存在=状態の結びつきと状況=状態の結びつきに分けてのべた各5項目のそれぞれについてのべてみよう。

存在=状態の結びつきの場合

- (i) カザリの中の動詞が存在動詞で、名詞が具体物を表わす場合、ふつう予定空間に存在するものを表わすので、この結びつきになりにくい。とくに、動詞が「いる」のような意志性の存在動詞である場合はいっそうそうである。カザリ名詞が具体物で、この結びつきになるのは、例17・25のような場合である。
- (ii) 例34~36や例198のようにカザリの名詞が側面や抽象的な所有物を表わしている場合にはこの結びつきになる。

例198 私達は眺望のある二階の部屋へ案内された。(千35)

この点で、側面や特徴を表わす名詞を一群としてまとめ出すことに語イ=文法的な意味がある。

- (iii) くっつくことを表わす動詞が場所性の名詞をかざることは非常に少ない。カザラレが建物や入れもの場合も、これがくればふつうは、この結びつきになる。例52・131・137などは、この少ない例に属する。
- (iv)(v) ふれた状態で存在することを表わす動詞の場合は、(i)と同様、

ふつう空間的な結びつきになる。状態の結びつきになるのは、例51のような場合で、あまりない。なお、これと似たものに空間作りの結びつきのあることはすでに例72～77でのべた。

状況=状態の結びつきの場合

(i) 部分については同じ。(例43・45)

(ii) くっつきものについては、いろいろの程度があってその限界に一線を描きたい。(例40～42)これに関しては、状態的な結びつきと場所的な結びつきの間に中間的なものがずっとつながっていると考えるより仕方がない。

(iii) 発生物に関しても中間的なものとするのがよいだろう。(例199)

例199 ペンキの香のする階段 (桜88)

(iv) 部分に生じたものについては、もの名詞の場合と同様のことがいえる。(例44・200)

例200 石垣の上に芝生の生えた場 (時261)

(v) 側面ないし抽象的な所有物についてのべたカザリがある場合には、状態的な結びつきになる。(例201～203)

例201 なかみのわからない籠 (道115)

例202 寄宿舎から見るとは方角の違った学校の構内 (桜89)

例203 値の出た広い地面 (時307)

今までのべてきた状態的な結びつきは、カザリがある状態を表わし、カザラレがその状態の主を表わしている。この点で、例204・205のカザラレがカザリの表わす動作の主体を表わしているのと似ている。

例204 外出の支度をしている母 (真7)

例205 壁に掛った額 (桜180)

しかし例204～205などの組み合わせは、カザリのあらわすことがらがカザラレの表わすもののワク内でおこっているのではないという点で、状態的な結びつきと異なっている。

状態的な結びつきは、場所的な結びつきの形をかりて、場所的な結びつきから独立した独自の結びつきなのである。その意味で、場所的な結びつきとも、主体的な結びつきとも異なる独立のカテゴリーをつくっているのである。この点で、前回報告のAの内部は修正しなければならない。

状態的な結びつきか主体的な結びつきかが今のところ明らかでないものに、例

206～208のようなものがある。

例206 袴をつけた老人の執事 (真116)

例207 着物を着た赤ん坊 (資料外)

例208 かみしもを着せた小猿 (資料外)

例206～208は、カザリがカザラレの表わす実体のまわりに存在することがらを表わしている点で146～147と同じである。しかし、例206～207はカザラレが「つける」「着る」という動作の主体でもある。この辺の問題は、今のところどうとらえてよいのかわからない。

6 周辺の問題

ぬきだしの結びつき 箇所的な結びつきのうちの、「ケイのあるところ」式のもの、ある部分をぬきだす働きをそなえている。このぬきだしの働きは、空間的な結びつきの中で行なわれているが、次のような場合には、主体の結びつき(例209～211)または対象の結びつき(例212～214)とだぶった形で出てくる。

例209 あまったところ (道73)

例210 入口のドアの左手に当たるところ (道176)

例211 小建築の往来に接した部分 (桜179)

例212 省けるところを省く (真156)

例213 ツケツケと思ふところを言って (時273)

例214 何か啣むところがある。(時288)

そして例215～219では純粋にぬきだしの働きをする。

例215 格別にこだはったところもない (道21)

例216 活々したところ (桜69)

例217 人を熱中させるところ (道90)

例218 原作を見せてくれる点だけでも (真63)

例219 人の利己心を無視した点において (真144)

例209～214のような組み合わせを「ぬきだし=主体的な結びつき」および「ぬきだし=対象的な結びつき」と呼び、例215～219のような組み合わせを「ぬきだしの結びつき」と呼ぼう。「ぬきだしの結びつき」は具体化の結びつきであり、ぬきだし=主体的な結びつきや、ぬきだし=対象的な結びつきは、叙述関係=具体化の結びつきである。したがって、これらは場所的な結びつきとは切り離してよいだろう。

時間的な結びつきとの関連

例220 休まうとしてあところへ (真17)

例221 「ツシマ」という長篇を書いてみるところだった (道182)

例222 帰るみちで (道180)

上のような組み合わせの中に場所的な結びつきから時間的な結びつきへの移行が見られる。

総主語の問題 今回とりあげた問題、特に状態的な結びつきを実現する組み合わせは、裏返しにすれば、多くは総主語をもつ文形式となる。もちろん裏返しにすることは文法形式をくずすことであって、直接の接近法にはならないが、事実関係の把握においては、深く関連している。今後、これをあわせて考えていく必要がある。

7 そもそも何か

「赤い花」という場合、カザリはカザラレの性質を規定している。「馬に乗った話」という場合、カザリはカザラレの内容を規定している。というような意味で、ここにとりあげた組み合わせでは、カザリはカザラレの何をどうしているかという、最も基本的なことが、今のところはっきりしない。

「水を入れるコップ」はカザリがカザラレの用途を規定し、「水を入れたコップ」は状態を規定するというようなことになれば「水を入れるのに使うコップ」が用途を規定し、「さかさにふせられたコップ」が状態を規定することになって、今までやってきた分類とは全然異なるものになってしまう。しかも、それは、修飾が限定か装飾か⁵⁾ というような文、あるいは文章の中でしか扱い得ない問題でなく、組み合わせの中での問題であるようにも思える。しかも、用途か状態かというようなことが文法の問題であるかどうかはわからない。

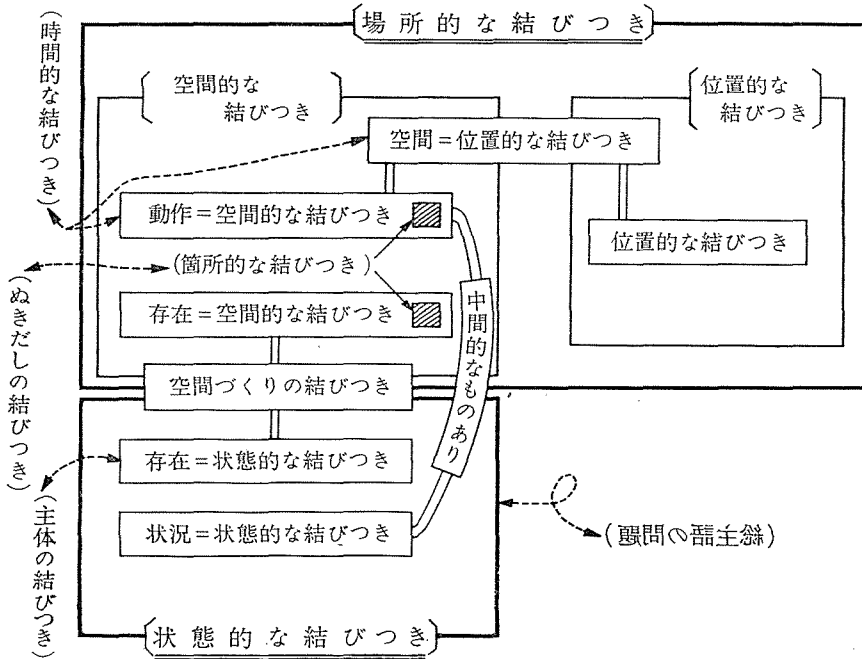
このあたりの基本的なことが明らかでない中で、ただ事実関係が組み合わせの形態にひびくところだけを事実即して調べたのがこの論文である。

基本的なことがはっきりしないため、各カテゴリーの命名もその場その場で行ったので一貫性がない。これらの名は、基本的な考察を深める中で修正されなければならないであろう。

8 ま と め

カテゴリー間の関係は図の通りである。

〈カテゴリーの関係図〉



各カテゴリーをまとめて規定しておく。

場所的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ場所（予定空間または位置）において存在・運動することがらを表わす結びつき。

空間的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間において存在・運動することがらを表わす結びつき。

動作=空間的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間において行なわれる動作を表わす結びつき。

存在=空間的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間に存在することがらを表わす結びつき。

箇所的な結びつき 空間的な結びつきのうち、カザラレが、カザリの表わすことがらがまさに行なわれるその場所だけを示しているもの。

位置的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ位置を起点、終点または通過点とする運動を表わす結びつき。

62 動詞の連体修飾法 (2)

空間=位置的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間を通過空間とする運動を表わす結びつき。

状態的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ実体において存在・運動することがらを表わす結びつき。

存在=状態的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ実体において存在していることがらを表わす結びつき。

空間づくりの結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ予定空間の化粧に参加することがらを表わす結びつき。

状況=状態的な結びつき カザリが、カザラレの表わすもののもつ実体の内部または周辺（ただし、予定空間を除く）に存在するもののもつ状態または動きを表わす結びつき。

カザラレとカザリの性格 カザラレに関しては、予定空間や位置をもつかもたないか、実体をもつかもたないか、それらをどの程度にもつか、などが大切であり、カザリに関しては、予定空間や位置における動きであるかいなか、実体に関することがらであるかいなか、などが大切である。

注

- 1) 「国立国語研究所論集1—ことばの研究」の中の「動詞の連体修飾法」(1959年)。
- 2) 「劇場で」は「劇場」のデ格、「小道は」は「小道」のとり立て形である。このように単語が文の中でとる形を「文法的な形」と呼ぶ(麦書房発行「文法教育」参照)。
- 3) 前回報告「3 叙述規定と具体規定」。
- 4) 前回報告「10 名詞の分類へ」参照。
- 5) このことについては、イエスベルセン「文法の原理」や川端善明「連体(一)」(「国語国文」1959年10月)が参考になる。また、これが組み合わせ論の問題でないことについては、宮島達夫氏が1960年6月16日に言語学研究会で報告している。